

# 広島「国際」井戸端会議

文・鈴木泰広 (法学部4年)  
写真・Suzuki, Yasuhiro



**広島は本当に「国際平和文化都市」か**  
私たちの身近なところにある「国際的」な問題について、出身国・肌の色・言葉の違いを超えて本音で話し、考える。それを通して、今日「国際平和文化都市」と呼ばれている HIROSHIMA を見つめ直す。それが「広島「国際」井戸端会議」だ。平成七年の八月から毎月一回定期的に開いてきた。平成八年三月二十四日は第八回、始めてから半年以上になる。

私は四年前、「国際平和文化都市」という看板に惹かれて愛知県から広島にやって来た。アジア大会、広島大学の統合移転、被爆五十年。広島は本当に「国際平和文化都市」なのだろうか。何が「国際」で、何が「平和」で、何が「文化」だろうか。それを肌で感じる事ができるだろうか。看板が一人歩きしてはいないか。確かに外国人は多い。が、それだけで国際的と言えるのか。

たらどうだろうか。広島を内側から見るだけでなく、外からはどう見られているのかを知ることも大切だ。日本だけでなく海外の人から見て、広島はどんな役割をもっているのか。あくまでもざっくりぼんやりと肩肘張らずに。そこで名前を「広島「国際」井戸端会議」とした。「国際」に「」をつけたのは、国際それ自体を考える意図を表したかったから。

ふだん何気なく使っている「国際」だが、非常に分りにくい。一時期、大学の名前や学科に「国際」とつけるだけでその人気が上がったこともある。使われている意味も怪しい。

## 個人と個人の付き合いから国際交流は始まる

はない。国という枠ではなく、個人と個人がどう付き合うのか、そこから「国際理解」は始まる。私は感じている。またある時、中国人の留学生が「中国では(自分の国が)社会主義だと思っている人はいませんよ」と発言し、びっくりしたこともある。

そのほか、なぜ化粧品や洋服の宣伝モデルは外国人が多いのか/外国についての情報の一面性/平和教育/戦争責任などについても話し合った。振り返ってみると、話はいつもいくつかの点に行き着く。教育/差別・偏見/国と国、人と人との問題をどう併せて考えるか/立場、習慣の違いによる考え方の違いなどである。身近な国際問題の本質は同じようなところにあるようだ。

## 井戸端会議のこれから

日頃生活していて、見ず知らずの人と話し合う機会はない。この井戸端会議は、初めて会った人と議論することができる。自分の知らないことを聞くこともできるし、話をする事で考えをまとめることもできる。話すだけで何になる、という人もいる。が、井戸端会議は考える場であり、その後どうするかは個人にかかっている。

私は四月から広島を離れて生活する。直接井戸端会議にかかわることはできなくなるが、井戸端会議はこれからも続く。広島が真の「国際平和文化都市」になるのを信じ、今度は外から見守りながら、「国際」とは何かを考え続けていきたい。

## モニター意見から

### 第六号

★今号の本誌に関する印象や感想について  
茶化すのではありません。「だんだん良くなる法華の大鼓」の感慨で六号を読みました。広報・編集の皆さんの努力がそっくり見えるような気がします。

今回はその三点を上げます。まず、「開かれた学問」で新しく(と思えます)試みられたQ&A「責任とベナルティ」。取り上げたテーマの今日性と広島弁指導を付けて、とかく学生、否、一般社会人でも回避しがちな金融崩壊問題を分かりやすく解説した包丁さばきと着眼は素晴らしい。ニヤリとした。そこには、何とか「馬に水を飲ませよう」という意図がうかがえます。この手の試みは今後も大いに展開してほしいと思います。

二つ目は、「留学生の眼」が改善されてテーマを一本に絞ったことです。以前に、モニターで注文したことが聞き届けられたのかも知れません。今回は「日本の人口」に焦点が当てられ、筆者の留学生の考え方がはっきり読みとれました。ただ、冒頭の自己紹介は末尾に別項でいれるべきでしょう。

三つ目は、難波紘二先生のエッセー「二〇〇〇字の世界」がフォーラムの窓として定着する予感がすることです。先生には、しゃちほこ張らずに柔らかな文を書く見本を示して欲しい。今回の「異文化交流」も文末に「異文化交流は今や外国との話だけではない。考えてみれば、キャンパスの中の大学生も年ごとに変わる異文化の波ではないか。大学教育と教官と学生という世代間の異文化交流では

## モニター意見から

### 第六号

★今号の改善点について  
大きな改善点として注文したのは、掲載文の思想の問題です。例えば、「開かれた学問」の「動物心理学への招待 動物の弁別学習と脳」。僕の理解が間違っていたらお許しください。僕の理解が間違っていたらお許しください。僕が、研究発表はフォーラムの目的ではないはずだから、専門外の読者、すなわち学生、教職員に意味を持つためには、この文と彼らをつなげる何かなくてはならないのではありませんか。つまり、それが「我々」という関係になるのか」という基本的視点

同じ事は、つい点数が辛くなってしまいう「学長インタビュー」でも言えると思います。今回は学長の対外的な公務がテーマだったようですが、素人目で見ると、最大のトピックスは財団の設立構想を聞き出したことではないでしょうか。その証拠に、見出しに「財団設立に意欲を燃やす」とあります。率直に言って、対外公務など何も話題がない時の話でいいのではありませんか。問題を引き出したら、焦点をそこに移すべきです。

つまり、今回の「学長インタビュー」は財団掘り葉掘りよかったです。出過ぎのようですが、ここでも視点II思想が問われないと、ピンぼけになるような気がします。蛇足を言えば、インタビューの最後の質問「学長から何かありましたらお願いします」は、いまだけません。僕が編集者ならその姿勢を咎めます。

次にこれまでの繰り返しになりますが、小さくて大きな改善点を上げます。

①「学長インタビュー」の学長写真ももっとアップ。学長の椅子を誇られても嬉しくありません。

②肩書きのばらつき。例えば「動物心理学への招待」の坂田省吾さんは「総合科学部」とあるだけで、何か文末のプロフィールを見ても分からない。しかし、次ページの阪本昌成さんは「法学部教授」とある。また「留学生の眼」のACHIRUDDINさんは「工学部」となっている。何年生かまで知りたい。

③できる限り日本語表記を大切にしたい。「」や文末の「？」は日本語にはない。「」は「」で十分だし、「？」は必要ないと思います。

④「はじめに」で始まり、「終わりに」で終わる論文調。例えば自己点検評価委員会の「教育と学習環境に関する一年次生調査」も依然、この形を踏襲しています。なくても何ら支障はないのに。しかも本文の前に付けられたリードが柔らかなで、洒落ているので読もうかと思つた途端、「はじめに」と大上段に振りかぶられてゲンナリ。この癖は残念ながら、柔らかな頭脳のはずの学生にも伝染している。短い文章である「投稿」でも「はじめに」とある。天下の大教授に、直ぐ今までのスタイルを改められようの角が立ちとうから、せめて広報や学内委員から頭を切り替え、悪しき伝統を追究してください。あの言葉がないだけで、いかに読みやすく書けるか、そうとう工夫すること請け合いです。

(中国新聞社モニター)